

第 9 回 災害科学国際研究所「災害と健康」学際研究推進セミナーを開催しました (2017/9/20)

テーマ：シミュレーション・センシング技術を災害医療救援に活かすために
場所：東北大学医学部6号館1階カンファレンス室（宮城県仙台市）

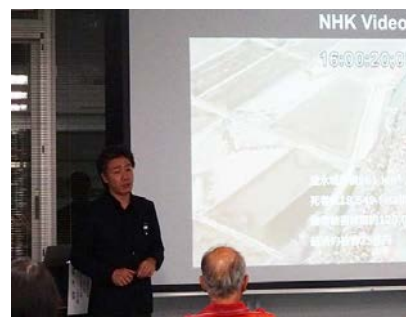
第 9 回災害科学国際研究所「災害と健康」学際研究推進セミナーを同研究所「災害と健康」ユニットと「災害空間情報解析」ユニットとの共催で開催し、当研究所 災害リスク研究部門 広域被害把握工学研究分野（兼 災害ポテンシャル研究分野）の越村教授が「シミュレーション・センシング技術を災害医療救援に活かすために」と題して講演を行いました。

最初に、東日本大震災による宮城県沿岸部の津波浸水のシミュレーションと実測の比較検証、南海トラフ地震による高知県のシミュレーション解析の概要や、これらの情報が被災地域の復興や防災の現場で実装化されている実例を紹介しました。大阪大学と共同で津波災害が予見される事態が発生した際に、最優先でスーパーコンピュータを用いた浸水予測を行う体制を確立し、震源情報を元に、10 平方メートルの精度での浸水域を10分以内に予測するシミュレーションを行うことができるようになりました。その成果は内閣府の危機対応システムの運用に組み込まれる形で実装の道筋がついています。さらに、今後、衛星の打ち上げや衛星によるリモートセンシング技術の開発を進めることで、予測精度が高まることが期待されます。

越村教授は今年度採択となった日本学術振興会の大型科研費（基盤研究 S）研究として、理・工・医学の連携による広域被害の把握、および災害医療支援システムの革新における学際的な研究に取り組んでいます。衛星からのリモートセンシング技術を津波災害後の医療救援や医療施設の防災に活用するべく、津波災害発災直後のシミュレーションにより、医療機関の津波浸水予測を短時間に行うことで、医療機関の被災の程度や支援ニーズ等を推測し、早急に救援方針の検討を行うことを可能にする計画を紹介しました。また、今後、NTT 社などと連携して、一般・事業者に向けて、津波浸水予報サービスを提供するための取り組み、津波予報センターの設置に向けた展望と現在の法制度が抱える課題等について解説しました。越村先生と「災害と健康」ユニットとの共同研究においては、今後、実践的防災学を進める上で、更に両学術領域間で有機的に連携して研究を進めることが重要であることを改めて感じられるセミナーでした。



会場の様子



越村教授

文責：愈志前（災害と健康ユニット）